優秀賞

こどものまちミニかぬま実行委員会（栃木県）

活動テーマ **こどものまち「ミニかぬま」**

活動の概要

毎年3月に、小学生から18歳までが市民になれるこどものまち「ミニかぬま」を3日間開催。年齢の異なる子どもたちが、まちづくりから住民自治や社会の仕組みを学び、生きる力を育むことを目的としています。
こどものまちでは、子どもたちが食べ物や雑貨などのお店を開き、市民として働いたお給料(ベリー)を使って、自由に買い物や遊びを楽しみます。また、市長選挙や演劇、カラオケ大会などのイベントも自分たちで企画し実行しています。大人は、意見や価値観を押し付けず、安全を見守ることに徹しているため、子どもたちの豊かな創造力が発揮でき、アクシデントも子ども同士で協力して対処できています。2011年の活動開始から7年。回を重ね、子どもたちは目に見えて成長を遂げてきました。特に、子ども運営スタッフは、実生活でもミニかぬまの経験を発揮し、他の地域活動へも積極的に関わるようになっています。協力スタッフからも感動的と好評を得ている事業です。

楽しく調理中のたこ焼き屋さんと、買い物中の市民。売り手も買い手も、企画もみんな子どもたち。表情が生き生きと輝いています。

活動の経緯

子どもによるまちづくりを鹿沼で!

子どもがつくる子どものための『こどものまち』は、1979年、国際児童年を記念してドイツのミュンヘン市で行われた「ミニミュンヘン」を発祥として、日本各地に広まりました。鹿沼市では2011年から毎年1回開催し、2018年で8回目を迎えています。

真剣な表情で、大工の店長が仕事を教えています。貴重な職業体験の場です。

まちづくりで成長する子どもたち

子どもたちは、商品づくりに工夫をこらし、学年やクラスの違う仲間と協力しながら「材料がなくなった」「機械が壊れた」などの問題を自分たちで解決する力を身につけています。また、人の喜ぶ姿をうれしく思ったり、相手を思いやるこころの成長が見られました。

ヘアサロンでは、素敵な編み込みスタイルに変身中。将来の夢につながる可能性も。

社会に向かうこころを育成

助成金が不採択となり、活動場所に困ったときに市長に直談判したり、活動を地域へ広げるために学校長にチラシ配布の依頼をしたり、「ミニかぬま」継続のためのシンポジウムを開催しシンポジストになったりと、自らの意思で現実の社会に向かい、大人を動かす力を持った子どもたちを輩出しています。

スイーツ屋さんの前は大賑わい。みんないい笑顔です。

参加者の声

- 初めて参加してから約6年が経ちますが、毎年たくさんの子どもの笑顔が咲く、色あせないイベントだと思います。「ミニかぬま」は私の居場所です!（高校1年生・子ども運営スタッフ）
- 人と協力することの楽しさなど、多くのことを学びました。「ミニかぬま」があってこそ、今の自分があります。(中学2年生・子ども運営スタッフ)
- 準備にとてもたくさんの人が関わっていることを知って、責任感が強くなった。(小学6年生・子ども運営スタッフ)
- 店長はお店の準備をしたり、アルバイトにいろいろ教えたりするので、新しいことができて良かった。(小学4年生・店長)
- にせもののおかねで、ほんものがかえて、すごい。(小学1年生・市民)

3つの工夫

進め方の工夫

子どもの自主性を念頭に置き、子どもたちと一緒に考えるように意識しています。まず年間スケジュールを立て、課題を解決する方法を子ども運営スタッフと一緒に考えます。定期的にも会議の場を設け、共通理解を図って子どもたちに寄り添うように配慮。店長は、店長教育を十分に話し合ったうえで実施しています。

連携の工夫

実行委員のネットワークを活かした物品調達や協力者募集を行っています。会議での話し合いに加え、グループラインを活用して情報を共有。他地域のこどものまち主催者との交流も図るようにしています。実行委員も協力スタッフも、大人が楽しく関わることができるように配慮しながら、活動を続けています。

継続の工夫

助成金を申請し、地域企業や個人から協賛を得ることで資金を調達。毎回、新たに実行委員会を結成し、組織化することで、一部の実行委員の負担が大きくならないように配慮します。子どもたちの「ミニかぬま」が好き! という気持ちを大切に、参加した子どもが楽しく過ごせる工夫を、子どもと一緒に考えています。

将来の活動の方向性

子ども運営スタッフを経験した卒業生が、今後実行委員となって運営組織を盛り上げていけるように、活動を導いていきたいと考えています。また、こどものまち「ミニかぬま」が、鹿沼市民全体から温かく応援してもらえる事業へと進化することが目標です。